

発達障害のある子供の円滑な社会参加に向けての早期からの一貫した支援
—保健、医療、福祉、労働等の視点からライフステージに応じた教育的支援を考える—

話題提供者：日詰 正文 氏（厚生労働省）
高木 一江 氏（横浜市中部地域療育センター）
西村 浩二 氏（広島県発達障害者支援センター）
司会：笹森 洋樹（国立特別支援教育総合研究所）

まずはじめに司会より企画趣旨と進行について説明がなされ、「発達障害教育においては、ライフステージに応じた支援、長期的視点での早期からの一貫した支援が必要であり、関係機関の連携が生涯にわたって不可欠である。」との前提のもと、1. 日詰氏による「発達障害者支援に関する現状と課題」についての説明（プレゼンテーション資料P107-P112）、2. 高木氏による「幼児期・学童期から思春期における課題」についての話題提供（プレゼンテーション資料P113-P121）と登壇者によるディスカッション、3. 西村氏による「青年期から成人期における課題」についての話題提供（プレゼンテーション資料P123-P127）と登壇者によるディスカッション、4. 質疑応答、5. まとめの順に本セミナーは進行された。

1. 日詰氏による説明の概要：発達障害者支援法の成立によって障害者としての支援に関する法的整備・体制整備が進み、平成28年の改正発達障害者支援法では新たなステップとして、障害者支援以外の分野での取組強化が課題とされ、近年は、企業等の職場、かかりつけ医、警察など、毎日の生活を支える場で関わる者の対応力を向上させる取り組みが進んでいる。①これまでは不十分であったが、今後の対応すべきポイントとして特に重視されているのは「感覚過敏」であり、このような「見えにくい」発達障害者への特性は、関係者が情報の引き継ぎを強く意識して行う必要がある。②発達障害の特性があっても「障害」に対する本人や家族の抵抗感があり、すぐには周囲の理解と配慮を受けられない者も多い。その場合でも、受けられるサービスの情報提供、特性を認識して前向きに暮らせることのエピソード紹介などを行いながら、「個々の支援を必要とするタイミング」に合わせて支援が提供出来るような引き継ぎも重要となっている。

2. 高木氏による話題提供の概要：発達障害のある人は中枢神経系の問題があつてうまくいかない。二次障害がおこるとさらに生活や学習に支障が出るので、二次障害を予防するために肯定的な支援が大切である。障害受容は、葛藤を抱えながら幼児期、学齢期と進んでいく。その過程では冰山モデルを参考に、水面下にある脳機能の凸凹からくる特性を理解し、定型と異なる情報処理と学習スタイルに合わせて支援することが必要である。また、多職種連携において情報共有・役割分担をしていくことが大切である。幼児の療育機関では多くのスタッフが指導に関わっていたが、就学後は学校の担任のみに多くの指導の方略を期待される。就学時の引継ぎは、教育機関が求めている情報を選択してうまくバト

ンを渡す工夫が望まれる。就学相談では、その児童にとって安心できる居場所、できそうな課題、認めてくれる人が提供される教室を選択する。一貫性のある支援のためには、移行支援をいかに行うかが重要である。思春期までに多くの失敗体験を通して自信喪失し二次障害を起こすケースも少なくない。授業を受け課題を提出し試験を受けるやり方や性の問題においても未学習・誤学習を生じやすく、自ら周囲との関わりを切っていくこともある。改めて、家族も含めて周囲が連携し、学校では教員が生徒と一緒に考えることで、自己理解、相談力を培えるとよい。キャリア教育における指導の中でも、学校では職務の遂行などハードスキルを教えることが多いが、まず生活習慣などのライフスキルや、コミュニケーションや社会性などのソフトスキルを育てることを大切にしてほしい。

上記の話題提供を受けて、障害受容や自己理解を進めるために考慮すべきことについて、ディスカッションがなされた。

3. 西村氏による話題提供の概要：発達障害者支援法の施行後、知的障害がない発達障害のケースが増え、相談の内容も変化している。学校では、勉強はある程度できて好きな科目に一生懸命取り組み、苦手な部分を先生や周りの生徒がカバーしてくれている。一方で社会に出ると高度なコミュニケーション（例えば嫌な人にも笑顔で対応するなど）の面で課題が生じ、成人期に自閉症スペクトラム（ASD）の診断を受けるケースも多い。配偶者からの相談や、職員や支援者からの巡回相談では、大人についての相談ケースが少なくない。また、雇用に関しては、障害者雇用ではなく一般雇用で就労するケースが増えてきており、そこでの配慮についての相談もある。学校は集団場面が多く、集団の中で学べる効果もあると思うが、集団の中で学ぶことが難しい子供にとっては失敗経験を重ねる場になってしまうことが多い。就労に際してうまくいかないケースも散見される。結婚や子育てをきっかけに違和感をもち、相談に来るケースもある。子供ができて生活スタイルを変えることに抵抗があるケースや金銭面での問題を抱えるケースなどもある。職業生活では、学生から就職、部署替え、昇進など、環境の変化から課題を生じやすい。昇進して部下を見るのが難しかったり、ミスが許されない上司になったとたん、対応できなくなったりする。障害が疑われるが本人に自覚がない、そのため診断を受けていないなどのケースもあり、何ができていなくて何ができるのかアドバイスを受ける経験がない。教育の中で完結しなくてもよい、別の分野・領域に協力してもらうことで一歩進むこともある。

上記の話題提供を受けて、問題を抱えているが周囲から見て目立たない場合に、早期に気づき支援につなげるためのポイントについて、ディスカッションがなされた。

4. 質疑応答：高校通級の制度開始にむけて実践研究を進めているという高校教員の方から「進学校や定時制、通信制など様々な課程の中で、様々な状態像の生徒がいるが、通級で何を行うとよいか」との質問が出され、登壇者からの回答概要は以下の通りであった。

高木氏：生徒と先生の関係作りのために、生徒の好きなことをとことん聞く、指導から入らずに、この大人は信用できる、真剣に向き合ってくれると認識させる。相談ができるようになると社会性が育っていく。遊びを多く知っているスタッフを仲間にするとうい。

西村氏：相談して言われた通りにやったのに失敗したという経験を持つ人も多い。相談してプラスになった経験が次につながる。本人なりの理屈で考えているので、まず言い分を聞き、その上でどうすることが自分にとってメリットがあるのかという経験をさせる。

日詰氏：「自分の特性を知っていくっていうのはかっこいい」と言いながら、そういうテンションに持っていく。(発達障害であることが) 残念、と思っている人には相談したくない。漠然としたことを言わず、一つ一つ丁寧に確認してやっていこうとする人はかっこいいという意識を共有していけるとよい。

5. まとめ：子供に丁寧に説明することの大切さが確認され、最後に話題提供者から、以下のように一言ずついただき、閉会となった。

日詰氏：高齢者まで所管する厚労省として医療受診に関することも重要な引き継ぎ事項と捉えている。保健の先生も交えて考えていただければと思う。

高木氏：一回顔が見える関係になると実際の現場で向き合うヒントを共有しやすくなる。多職種連携を持ってほしい。

西村氏：企業側から、学校の引き継ぎの内容としてよいことは伝えてもらえるが、できないことや課題が伝わってこない、との相談も受ける。支えるために、オブラートに包まず自信をもって伝えてほしい。